



• 0049957000 •

3

0049957-000

特222-153

尋五の綴方

浅黄俊次郎・著

厚生閣

昭和11

AHJ

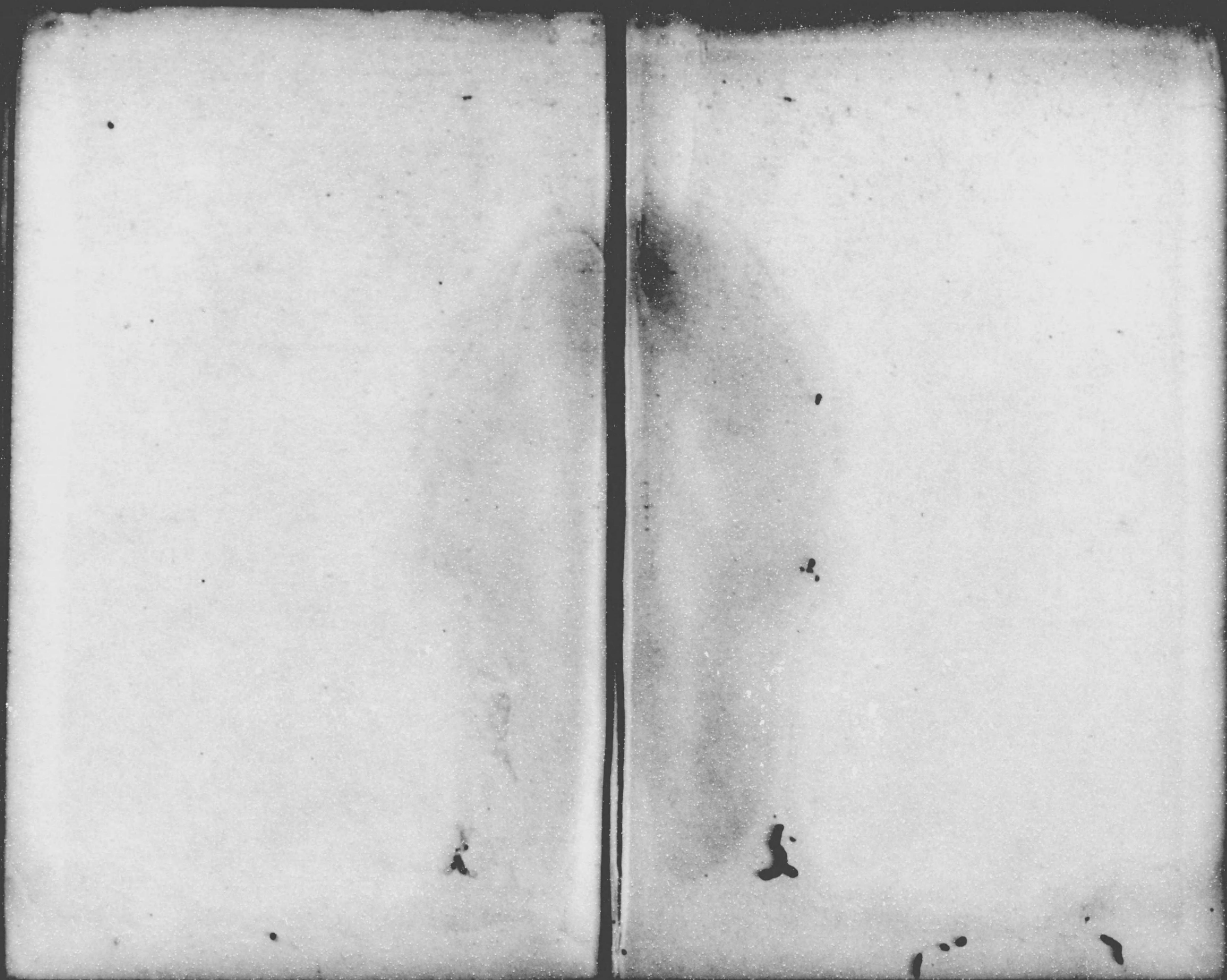
この著作物は、著作権者不明のため、  
第67条の規定に基づき、平成12年  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用す

方綴の五巻

郎次俊貴撰

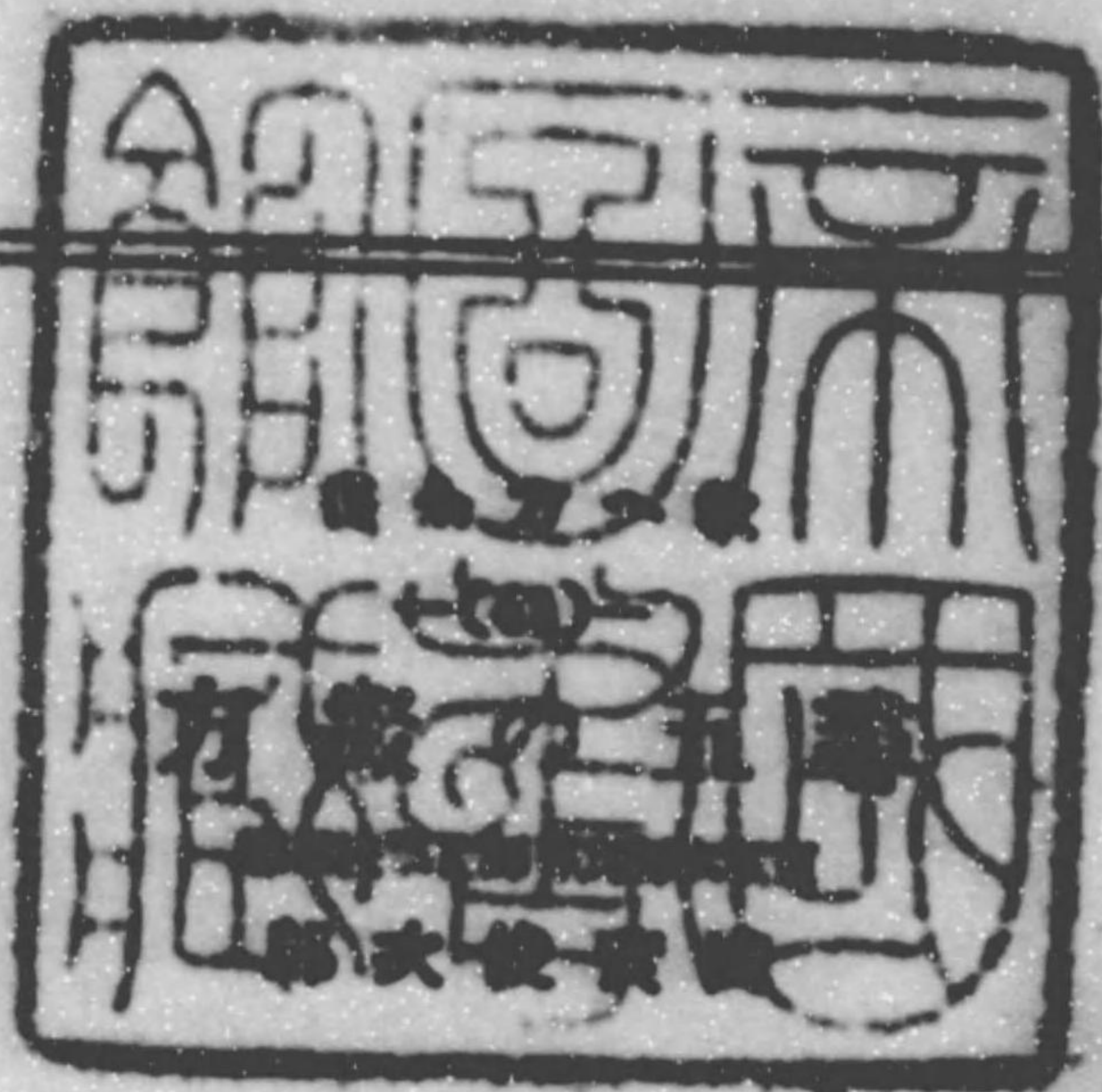
刊行堂

特



詩222

153



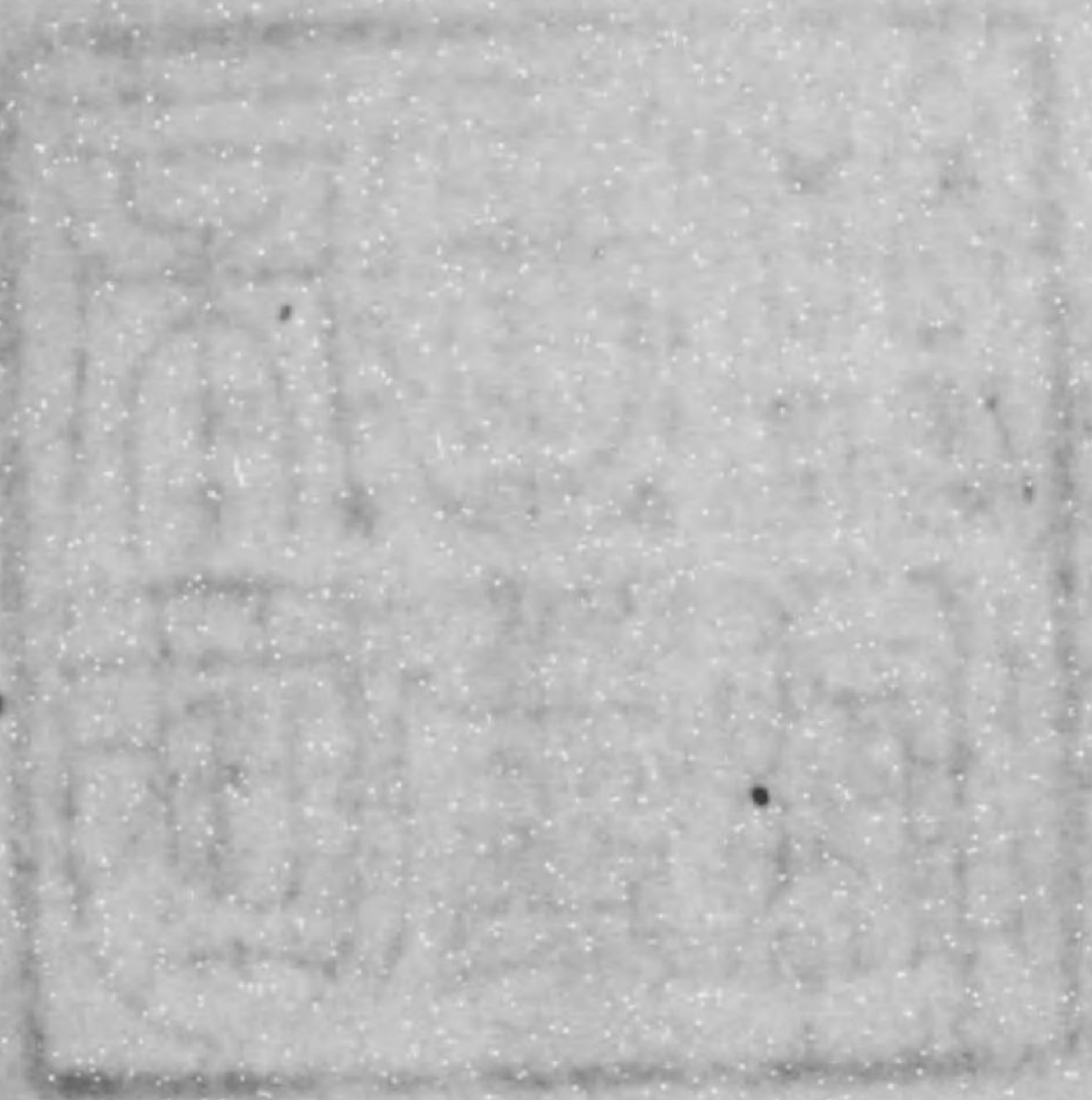
## 教育の弊

東京女子師範学校  
附属女子小学校  
図書印

佐々木秀一

- 教育界に小學校教育は、極めて日常的な地産なものであつて、決して華やかなものではない。従つて教材と教育技術の研究とは、教育實際家にとつては最も重要性のあるものである。現代の教育界に教材研究の旺盛に行はれるのは、むしろ當然の現象である。然るに教材研究と云つても教育者が全然これを模倣し他人の教材教法の成果をその儘利用し、自ら研究し自ら創造する教育的熱意を失ふ結果を誘致するならば、却つて教育の實質的進歩を阻害するに至るものである。然して現代に於ける教材及び教法の研究には、さうした危險性が多分にある。

勿論、教育家が後に高遠なる理想にのみ走つて、實地教育の大道を忘れる



ことは誠に或むべき現象であるが、さらばと云つて根本的統合的な研究を  
 缺如したその日暮しの機械的教育は、教育を單なる事務化するものであつ  
 て教育の外道たるは明かである。

● 本書の組織を總覽するに、同じく各科教材教法の實際面を取扱ふにして  
 も、各學年各教科の根本方針と指導要領とを明かにして、日々具體の教法は  
 各人の創造的研究に俟つ餘地を渡し、學校教育者としての統一的態度の確  
 立を中心にして編纂されてゐる。然も執筆者は現代の教育界にあつて各  
 科教授の専門的研究に造詣深き實際家諸氏であり、恐らくこの體のもの  
 としては比類なき組織的出版と云ふことが出来るであらう。本書が廣く實  
 際家の好伴侶となり、よく教育教授の要領を授けし、これによつて我が國民  
 性と郷土の實情に即した新教育の實現に役立つならば幸甚である。

第二編 第五の編方針——目次——

第二章 第一學期の指導 …… 一

四月の指導 …… 一

一 國語文の指導 …… 一

二 動物を主料とした文の指導 …… 一

三 素人文の指導 …… 一

五月の指導 …… 一

一 生活の研究を主料とした文の指導 …… 一

二 自然現象の指導 …… 一

三 自然現象の文の分類 …… 15

六月の分類 …… 15

一 内容が主題とした文の分類 …… 15

二 自然現象の記述の分類 …… 15

三 手紙文の分類 …… 15

七月の分類 …… 15

一 記行文の分類 …… 15

二 日記文の分類 …… 15

三 生活文の分類 …… 15

第二章 第二學年の分類 …… 15

九月の分類 …… 15

一 生活文の分類 …… 15

二 書文の分類 …… 15

十月の分類 …… 15

一 手紙文の分類 …… 15

二 書文の分類 …… 15

十一月の分類 …… 15

一 書文の分類 …… 15

二 自然現象記述の分類 …… 15

十二月の分類 …… 15

一 人物描写の文の分類 …… 15

二 人物描写の文の分類 …… 15

第三章 第三學年の分類 …… 15

第二章 第一學期の指導

一月の指導	101
一 基礎的練習文の指導	101
二 自然現象の観察的練習文又は研究報告の文の指導	102
二月の指導	103
一 経験した時の心的現象の文の指導	103
二 人物観察の文の指導	104
三 自然現象の文の指導	105
三月の指導	107
一 説明文の指導	107
二 観察的練習文の指導	111



月	要	項	文	例
四月	感想文 動物を題材とした文 説人文		地獄 ああ可愛さうに 僕は机である	
五月	生活調査の記述 自然観察 自然観察の文		家の人の研究 さわやかな五月	
六月	内容を題材とした文 生活文 手紙文(近況報告)		思いつたこと 題とび	
七月	紀行文 日記文 生活文		高尾行き	

四月の書写

一 感想文の指導

- 1 生徒最初の書写方として、五年生になつたことについての希望、反省、決心等を促へさせて記述させるのである。
- 2 當學年になると、物象に対する観察も著しく出来て来るが、同時に、自己反省の力とか、批判力、判断力なども發達して来るので、徐々にこの感想文を組織的に計畫的に指導して行きたいと思ふ。本教材は、先づその初歩的指導に充てる。
- 3 勿論感想文といつても、何處までも児童生活を通したものでなければならぬ。當然的な概念的な言葉や、觀念に促はれて、妙に大人びた、又内容の茶化なもの、觀念遊戯的なもの

のP.13面。

『現代の文壇』に『現代の文壇』、『現代の文壇』のP.13面。

文壇 雑誌

一 現代の文壇のP.13面

二 文壇一 現代の九月

(1) 前は十月

十二月

の今

の雑誌

僕も四年生の九月頃は勉強なんか、大層だったの、書取り・漢方・理科などはひとつも出来なかった。書取りなどは何時も平均値三十分の十七と百位の悪い成績であったので、勉強も飽き多い方ではなかった。又十月や十二月などは勉強がしたらいと思つて勉強

をしても、お見さんたちが嫌いなと、しんどい遊びたくなつてしまふ。だが今はもうそんな事をした事がない。僕は何時もきつと、一時間以上勉強してゐる。ちか頃大きいお見さんに「お見さんお見さんお見さん、まことに大層へはいた。」とほげまされたので、「一生けんめいに勉強してゐる。だからこの頃は勉強が大得意になつた。始めて勉強の面白さを知つた。」

後評

1 今まで読んだつた雑誌が、今では大好きになり、始めて面白さを感じ出したと、得意な氣持から編り上げたものである。

2 感想の表現も、具體の叙述も、左様よくは行つてないが、初歩的なものとして取上げた

3 作者の内情が透ける。自分の行爲、習癖に対する批判も現はれてゐる。かうした態度と力とが、漸次立派な感想文を生むものではあるまいか。

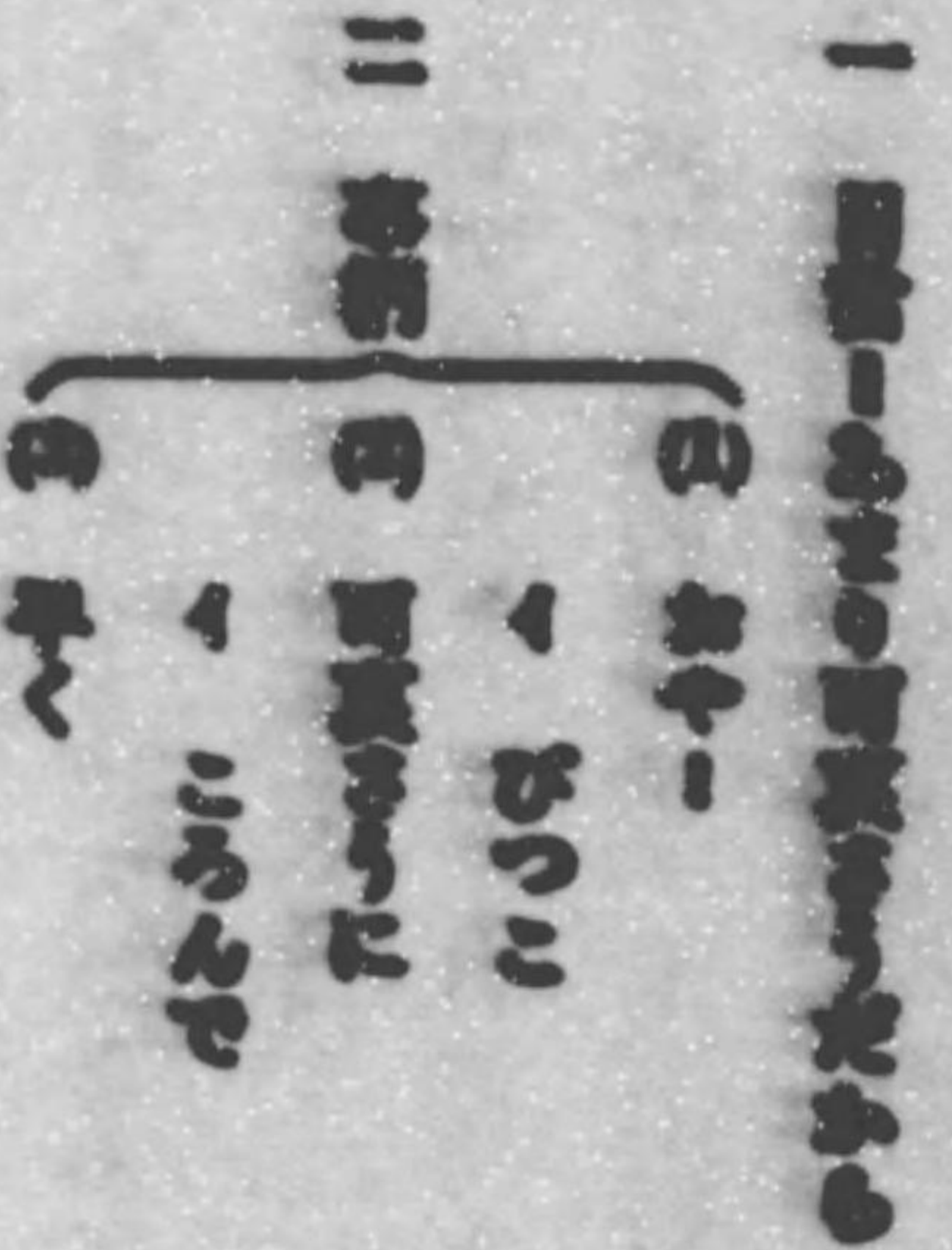
- 彼等の「愛の」道徳を学んだ。「19」 世にこの道徳は已れぬ。又道徳を説くは、世に道徳の道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。
- 世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。

II 道徳の道徳は已れぬ

道徳

- 一 世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。
- 二 世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。
- 三 世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。
- 四 世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。
- 五 世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。

世に道徳は已れぬ



世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。

「世に道徳は已れぬ」

世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。世に道徳は已れぬ。

よりながら我に飛びつゝた。其の身ははねはず、

「おや。」

と言つた。我はびつくりしたのを無難はなら。玉はむきんにも右の脚足が折れてゐるのではないか。我は

「まあ可哀さうに、どうしたのかしら。」

何時もなら、我はもつかり置つたり、又何時も早くもあつておきたつた。其の脚の事を考へると、可哀さうでたまらぬ。我は

「オオオオオオオ。」

とかく顔をなでてやつた。玉は其の顔を見つめてゐる。我は折れてゐる脚足をよつとよはつて見た。大分熱を帯つてゐる。

「まあ、ほんとうに可哀さうに。」

我は何もかも忘れて玉の事を考へた。其の事

「玉、玉、玉」

ともしよりの方の眼が潤えた。

「あら、早んではあるが。」

と我は言つた。玉は聞えたりして、ちひさきおなごの眼の光がうつりつた。其の玉の事を考へながら我の顔のそばまで来た。

「キヤンキヤンキヤン。」

と、とても大きい聲で玉が鳴いた。我はどうしたのかしらと思ひながら、元の所に行つて見ると玉はいたい足を下敷にして、ころんたらしく、中々起上りや言ひら言ひら言ひら言ひら言ひらである。其の中にだんだん立てる體になつて、又とほとほ自分の眼の光がうつつた。我はそれを見送るながら、

「大御になさいよ。」

と言葉をかけてやつた。我は一日も早く玉の足がなほるといららと思ふ。

- 1 「筆致」の書き方は簡明とは書つて、夫の文藝の中心點を以て書いてあるが、此の方は却つて兒童には事柄がことごとく明かた。
- 2 作者は大見なので、「驚き」に足るよゝながら驚びつらた。「とある」で「びびり」に折れてある。「など」と大げさな書き方をしてあるが、大した事ではなかつた。
- 3 別に簡明して書き、筆の力の「大剣」にならぬ」と書きかきつけてやつたとあるあたり、作者のよゝしうが書かぬはた書かぬ。

三 個人文の書法

- 1 文章の書法は、書き手としての個性を表現する。
- 2 文章はよく見つけ、よゝしうの上、筆致、文章の書法、書法、書法、研究する。
- 3 文章の書法は、書き手の個性を表現する。

- 1 文章の書法は、書き手の個性を表現する。
- 2 文章はよく見つけ、よゝしうの上、筆致、文章の書法、書法、書法、研究する。
- 3 文章の書法は、書き手の個性を表現する。

文 明 供は机である

供は今こんな小刀のあとをつけられてあるが、元をたゞせば熊野川の上流に、思ふままに流つてゐた一本の樫の木であつた。或日一人のきこりに見つけられたが百歩目、どまりと倒され、あつと思つた時は友達と一しよにざりざりにしぼられて、いかたにくまれ流れの滑い熊野川を供は友達と手をとりあつて下つた。深山幽谷の所を流れにまかせて下つて、だんだん川口が廣くなつたと思ふと、新宮と貫木處に着いてゐた。繩をとかれて、今度は大きい船に乗せられ、太平洋を乗り切つて、東京の或木材問屋に賣られた。買が良いいので、すぐ細工師に見つけられ、立派な机になつて、或商店の店先に飾られた。物音一

つじなら、肥州前野の山奥から、此の東京のいぢみした處を見せつけられた時はやつと  
した。

僕は早くどいかにを物ちやんに買はれて一しやに遊園したかと買つた。  
園がなくなつて四五日後に、あるを物ちやんに買はれて行つた。最早くもし僕の乳  
に肉つて遊園をなまつてから東京に行らつしやる。遊園はたらくつた。夕方四時を時計さ  
んが知らせて下さると、待て置しくつて待て置しくつたまらなら。友は熱心に遊園をな  
つてを休みになる。僕の二時買つたら、僕の二時買つたらにこそ遊園を買つて下さる事  
だ。しかし僕の遊園は長く買つた。二ヶ月買つて物ちやんに、僕の遊園を買つて下さる  
して買つて買つて買つた。

僕は遊園に買つて買つた。僕の遊園は買つて買つた。しは早くすると外で買つた  
を買つて買つた。それは古物屋に買つた買つた買つた。それを買つた買つた買つた  
買つて買つて買つた買つた買つた。二ヶ月買つた買つた買つた。二ヶ月買つた買つた  
買つて買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた

イマでけつるいたつた。僕は買つて買つた。何時も買つた買つた買つた。買つた買つた買つた  
で買つた買つた。日本書生に色々と買つた買つた。これには買つた買つた買つた。買つた買つた買つた  
で。又買つて買つた買つた買つた。今買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた  
と、ある買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた  
た花入になにか買つた買つた。

僕は今まで色々の買つた買つた。今のを物ちやんに買つた買つた。買つた買つた買つた。  
僕は今はこのやましり買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。

説評

1 中々買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。  
買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。  
買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。

2 その買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。買つた買つた買つた。

更に善い子供の所有に歸したと身の上を定めてゐる時、子供らしい展開ではあるが、苦心の跡が想像されて感心の外はない。

3 然もそれ等の子供の行動、性質をも或程度まで敘寫して居り、それぞれ變化を興へて特異を發してゐるが、これは確かに子供の世界に對して批評を下した作品と賞讃し得ると思ふ。

## 五月の書評

### 一 世帯の研究調査記録の發表

調査記録

1 既時流行も出した調べる観り方の主義には賛意を表する。然しどこまでも兒童の生活に即し、兒童の理解を越した作品を目當としなければならぬ。

2 單なる研究、調査は危險である。小さな大人とならせたくない。役人の調査に移へさせたくないと思ふ。兒童の生活経験から生れ出るものでありたい。

3 先づ最も親しみ多い、最も調べ易い「家の人」の調査から始めよう。

文例

家の人のかんきゆう

二 副校長及び水曜の掃除當番長をやる。

三 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。  
二 副校長及び水曜の掃除當番長をやる。

三 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。

二 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。

三 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。

二 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。

二 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。

三 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。

二 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。

父	四十七歳
母	三十八歳
長男	四十五歳
長女	十二歳
次女	八歳
三女	六歳

二 校の仕事 (一) 學校入日曜、祭日、外休日の日を除くことは、毎日行く。



(其の仕事) 一 水天候のよらぬ、又は夕方には積木に水をやる。

二 へら入りの草にはつてあると、ムースを敷つて、もやうめんにはすつてら。

其の仕事

(其の仕事) 一 鹿のしんじ。

二 鹿。

(其の仕事) 一 鹿。

其の仕事

(其の仕事) 一 鹿。

(其の仕事) 一 鹿。

三へ 四

其の仕事

一 鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

二 鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

其の仕事

一 鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

二

鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

其の仕事

一 鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

其の仕事

一 鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

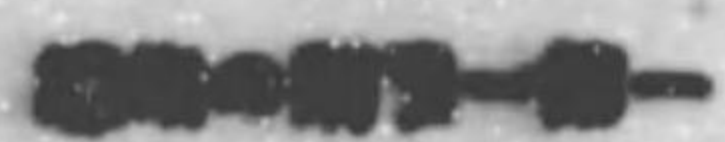
二

鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

其の仕事

一 鹿園がすむと、うしひの食と味に、骨方を磨けとをししやる。

其の仕事



一 自分が買つたばかりに、買物をやる。

二 買物つてゐる物を見たと、すく「なんばあ、お見入な。」「お見入。」

目次

買物の食料

すまな物——お汁、おすし、ちまひひり。

御飯——朝、昼、晩、三膳 計九膳。

さらひな物——かつや、すまし汁。

火の食料

すまな物——とろろ汁、よた肉、天ぷら。

御飯——朝三膳、昼御飯、夜四膳 計七膳。

さらひな物——ライスカレー、小魚。

湯の食料

すまな物——玉子、牛乳、おもち。

御飯——朝、昼、晩、三膳 計九膳

さらひな物——八景 鹽せんべい。

湯の食料

すまな物——おすし、おましひ、うな煮。

御飯——朝、昼、晩、二膳 計六膳。

さらひな物——玉子、肉のあまらみ、あまら。

味の食料

すまな物——お餅、おすし、梅干。

御飯——朝晩二膳、昼二膳 計四膳。

さらひな物——小豆、あんこ。

湯の食料

すまな物——すいくり、まるといも。

御飯——朝二膳、昼三膳 計七膳。





二、新緑の美しい景色

二 新緑の美しい景色

三 新緑の美しい景色

四 新緑の美しい景色

五 新緑の美しい景色

六 新緑の美しい景色

七 新緑の美しい景色

八 新緑の美しい景色

九 新緑の美しい景色

五月になると、今までは青がかった木々も、緑々とした新緑が舞い降りる。

木は新緑の葉、どれもこれも美しく新緑を舞っているのは、見るからに新緑がよい。

山々の新緑は夏はこんもりと茂り合っている。新緑の葉は青々であるが、五月は新緑の葉、赤みがかった新緑がよい。又新緑の葉がよい。又新緑の葉がよい。

て土の香と一新に、新緑のかんばしい香がして来る。此の新緑は青々とした新緑の香は五月でなければ見られない景色である。

田舎の田んぼへ出て見れば、此所にもやはり新緑が青々として、美しい新緑のよけを舞っている。所々に黄色い菜の花が咲いていて、黄色い葉がひらひらと舞っているのは実に輝かで、大層美しい。又、大森に向つて、勢よく飛び立つひばり。これも本宮に新緑がよい。今までは枯葉ばかりで、青々とした新緑は少しもなかつた荒野も、青いもうせんを散まつた様に美しい新緑の草が生えて、よい景色である。今は生き生きとした新緑の世界だ。今までの枯葉の世界に替へると、どれだけよいかかわらない。今、此處で新緑を見てよう。

新緑の世界

枯葉の世界

- 一 生々として大層新緑がよい。さわやかだ。又、明るい。
- 二 大層美しい。
- 一 野へ出て見ても枯葉ばかりで淋しい。
- 二 またなく見えていやだ。

此の様に、新緑の美しい景色は、新緑の葉も心をも爽快にしてくれらるので、一年中此の

第 1 卷 第 1 号

目 次

- 1. 1910年の経済状況と将来の見通し
- 2. 1910年の財政状況と将来の見通し
- 3. 1910年の貿易状況と将来の見通し
- 4. 1910年の金融状況と将来の見通し

目 次

1. 1910年の経済状況と将来の見通し

目 次

- 1. 1910年の経済状況と将来の見通し
- 2. 1910年の財政状況と将来の見通し
- 3. 1910年の貿易状況と将来の見通し
- 4. 1910年の金融状況と将来の見通し

目 次

1910年の経済状況と将来の見通し

1910年の財政状況と将来の見通し

1910年の貿易状況と将来の見通し

1910年の金融状況と将来の見通し



「君は、吉原さんは、外の所から出て来て、家の後について来たやうだつたが、おぼえ  
なかつた。彼女の顔を行くと、前に二三年前の女の人が、五六人位かたまつて、お話をし  
ながら歸つて行くので、大層の数を数つて、あしたの朝に歩いた。そして私は又も彼處に  
飛込んで、大急ぎで、黒漆の箱を先達の遺品の箱に入れて知らん顔してそこへ歸た。吉原  
さんは、お部屋には入つて来て、自分のお話を聞いて、一巻の巻をたまたまして歸た。私はお  
話だつたお話を。」

「君は、お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」

「お話を。」



批評

1 二人の行動と心算のいさまつをてきばきと書き述して、情によく書けてゐる文である。  
(作者は大見、他は匿名)

2 二人の個性も充分に表はれてゐる。

3 情しれた表現の文として、生活の裏面が見える時、最大な効果を成す。

4 「さう決して見に行く事の方はない。」と決心したといふと驚かすのはあるが、この意を

一層の作者が、心の奥から表へて書いたのである。書かすなら書かす。

5 二人の個性は、書き手の、大見の個性の裏面を、いかに書いて表現の

裏にある。余りに個性の裏面を表現しようとする書かすは、この大見の

たがひに書いて、大見は個性の裏面を、いかに書いて表現の裏面を

いかに表現、書きかすは、いかに

II 大見の個性の表現

批評

1 二人の個性は、書き手の、大見の個性の裏面を、いかに書いて表現の

裏にある。余りに個性の裏面を表現しようとする書かすは、この大見の

たがひに書いて、大見は個性の裏面を、いかに書いて表現の裏面を

いかに表現、書きかすは、いかに

いかに表現、書きかすは、いかに

いかに表現、書きかすは、いかに

II 大見の個性の表現

1 二人の個性は、書き手の、大見の個性の裏面を、いかに書いて表現の

II 大見の個性の表現



- 1 開けた道を明記して居り、その開け方も、種類から、方法や、それぞれの得意な人といふ様に、数回なくやつてゐる。
- 2 文人のきれいに読んでゐる様を羨しく思ふ心持や、其等の活躍もよく出来てゐる。
- 3 然も、女のみのおびが、男生徒間、大人の世界にまで流行してゐるのが、よい事だと思ふあたりまで来たものである。
- 4 この「文」は「書」である。「書」は書を以て語を行くことと「文」である。

三 手紙文(近世初期)の概観

- 1 手紙文だからと言つて、特殊に考へてはいかぬ。普通文と同じやうに、自分の心、身、入るを表現するものであることをよく理解せねばならぬ。
- 2 普通文との異なる特徴は、只特定の人の存在することである。
- 3 相手も文人と想定する。然し想定の人を對象としてはよくない。見聞の自由に実在の文

- 4 相手に對して語する態度に留意しなす。
- 5 近世初期の文であるから、語彙は心算で可い。心算の語彙を用ひなす。

かみの巻

I 女川

一

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

女川

一

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

女川

「おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。おれは女川に生れた。」

やがて二重の扉を開き、さしたかと思つたら、夏野の方へ進み出した。こんどはとても早く、たちまち見えなくなつてしまつた。多摩川は水が多なり、ただたてがきが見えただけだ。夏野を過ぎて多摩川へ着いた。多摩川も多摩川より水が多なり、夏野が、「多摩川といふのは遠いから多摩川なので、深い川なら多摩川といふだ。」と言つて僕等を笑はした。多摩川からすぐ多摩野へ向つた。道の両側にはきれいな小川が流れてゐる。この川で魚を釣つたり、大衆を釣つたりするさうである。多摩野までは道が分る。道の傍には、

「くらつしやい。魚が十條、お魚が十條。」

等と言つてゐるさう。多摩野がそれさうの「くらつしやい」とらふ調子でまわして、

「なめていらつしやい、にはひかんでいらつしやい、買つていらつしやい。」  
とうまい調子で言つたので大笑ひした。

多摩野へ着いた。此所は大正天皇の御殿である。御殿はここから去勢を正して御殿した。それから高尾山へ向つた。高尾山は道が分る所、道が大百二十米あるさうだ。大

分くたびれたので道で少し休み、又登り始めた。

「大こんしやうじやう、お山は晴又。」

と口々にみんなとなへながら元氣を説いた。女の生徒が先頭でうつくりしてゐるので、男の方ではよりよきことも無し、とうとう女を導きして先頭へ行つてしまつた。

多摩野へ入つたのは午後〇時半頃であつた。お魚はスヨスヨで、先生の言葉を待たされず、御殿を聞いた。生徒等もいろいろ御土産なども買つた。僕は蛇と鱈と魚と海苔と魚を買つた。

凡そここで一時間位休んで、又登り始めた。大見晴へ行くのである。僕は先頭で記念の写真を撮つて休んだ。東の方には筑波山が見えた。大山、丹波等の山もあるのだから、山があまり多いので、どれがどれだかまづはり分らなかつた。少し暑つてゐたので富士山が見えなかつたのは残念だつた。十二ヶ所が見えるさうだが、山ばかりであつて、どこが鏡かわからない。しばらく登んで山を降した。

降りほととけはしく走ると止らない位であつた。道を見つけた時先生が

「この水は飲めるのだ。」

とをつしやうた。彼も大層の水がなかつたので、その水をくんで飲んだ。その時には旅人もあつた。彼をすうりて道に來た。道中の急所の邊、舟石や土壁をよつて渡つた。船は急ぐのつづから急車を踏まされた。そして濁川から中大船を行くと同時に濁川から山手船に乗り換へ、急流を渡して家へ歸つた。大分つかれたが、今度の旅足は今までのいならぬしり難足であつた。

### 説明

- 1 舟へんへ船りける。この船を舟といふのは舟の類ならんが、舟といふ。
- 2 舟石、舟石といふのは舟を渡すに、文中に舟石といふ。舟に舟をうつす。

### II 舟石の舟

### 舟石

- 1 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 2 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 3 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 4 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 5 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 6 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 7 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 8 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 9 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。
- 10 舟石の舟石は舟石といふ。舟石といふのは舟を渡すに、舟石といふ。



## 文 田

先づて始めて見た書しらい、つゝへんかいたるもので書いた。

我が少くも買つたのは八時半頃だった。余にはつと明るくなつた。僕は暗に立つてゐる。よく見ると、書庫の静らしい。大船が岸に繋ぐけになつてゐる。人々は口々に感心しながら静を見てゐる。奥山の静かな人こみをかき分けて、僕と四五人の者が、奥の地下室へ降りた。彼の音がするかと聞える。書庫と奥地に白くそのぬいてゐるまれば、うでに巻いてピンでとめて行らつしやるお父さんが、二三人で、僕と一しよの二三人の子供に、静をぬがせて奥の奥室にかへさせた。よく見ると二人は、奥の静室と奥室大書庫だ。もう一人は何でも静室といふ六年生たさうだ。僕はお父さん奥に見送られて、奥のついで

てゐる静ろい方をぬがけて走り出した。静だんを降ると、ちよつと奥室さんの静な静だ静山の人達は僕達が静室旅行をやるのだと聞くと、又さほはちを聞した。デパートにある静なエスカレーターがあつて、下に行ける静になつてゐる。下をのぞくと彼がさよんさよんと大がほえる静に音を立ててゐる。此所は海上から、ちよつと十米位の静たさうだ。静室静室、静室静室のじやんで一列に並んだ。そばにゐた女の人が、色々注意して下さつたといよと静室水放だ。先づ静室静室と静室がエスカレーターで静室々々に降りて行つた。今度は僕だ。心を静らつて降り始めた。足が水につかつた。四方を見張したが、人のかげさへ見えな。静室静室、静室はちよつと行つたのたらう。僕は静室静室だ。彼は初めはまたちかたつたが、大船に静くなつた。一す光も見えないのじ、くわい静室静室の静な静で、ヒカビカあたりを照してゐる。よく見ると、白いセムロイアにすみでこく「静室の静」と書いてある。しかし明るくなんかちよつともない。たゞ光つてゐるのは此所の静室ばかりだ。あたり一週、奥の静室静室に静室静室がこんもりとしびつてゐる。静室のしびつてゐる静室を静室と、静室静室の静室だ。これたかちよつと静室静室の静室といつたたらう。大船を降りぬけると

はつと明るくなった。此の上は鎌倉が片側の海岸から、臨まないたらう。たんだん狭くなつて来た。上つた所は、海水浴で有名な磯子海岸だ。道へに來すくれたのは四郎さんと先着の鎌倉、森の兩家だ。しばらく磯子を多くと、休むひまもなく四郎さんに見送られて磯子海岸で人々が賑しく遊んでゐる中を、彼等三人は、沖へ沖へと進んだ。三人共無事に元氣よく所へ着いた。海岸に着かへた。地下道で買物袋を提げた。あつた。ひびきはやしたやましい叔父さんで、ニコニコ笑みながら、「よくやつてくれました。」とをっしやつて、彼等のかたをたたいて下まつた。四郎君は可愛まうに、眺めまうになつたので、叔父さんが助け上げたまうた。彼等三人は思つてゐると、腹がさめた。水筒は東の道から上つて、平野の光をめぐんで下まつてゐる。

### 第三章 家二子家の事情



月	九	十	月	十	月	二十
	感想文、随筆文	感想文	手紙文（有義見解と感嘆）	感想文	生活調査の記述 説明文 自然観察の文	感想文 人物観察の文
文	直説文	防犯演習	同上	神皇正統記	朝訓	取り壊された一本の木

### 九月の指導

#### 一 感想文の指導

##### 指導の目的

- 1 社会の出来事に對して考案させ、感想を記述させる。
- 2 社会の事象又は人事を直観的に批判的に觀察させ、觀察させて見識を深むる。
- 3 冷靜な態度を以て考案を興へ、論議々に所感を記入すること。
- 4 標題の具體的指導を施す。
- 5 随つかの具體的な事例から、一つの具體事象や人物について、観察の手帳の指導。
- 6 集中休暇中の事例を採るなら、題材はいろいろあるものと見よ。

「第一、新文化の輸入は、輸入の仕方で決まる。」

「第二、輸入の仕方は、輸入者の知識と、

第三、輸入者の知識と、

第四、

第五、

第六、

第七、

第八、

第九、

第十、

第十一、

日本文化の輸入と新文化の発生。その意味は、輸入の仕方で決まる。輸入の仕方は、輸入者の知識と、

輸入者の知識と、

輸入者の知識と、

輸入者の知識と、

「第一、新文化の輸入は、輸入の仕方で決まる。」

「第二、輸入の仕方は、輸入者の知識と、

輸入者の知識と、

輸入者の知識と、



一 昭和十一年十月十日の関東地方の地震に際して

二 消防隊の活動

三 消防隊の活動

四 消防隊の活動

五 消防隊の活動

六 消防隊の活動

関東地方の防炎隊は九月一日午後二時から始まった。雨から降り出した時は、中々止みまうもない。地震が来ると、防炎隊員は、雨のあつたままに動き出した。私は、地震が来ると一しよに、雨の中を土浦方面へ行った。雨もなく雨の上には煙が下され、白い煙はもうもうと高く昇りあたりは全く煙に包まれて、何も見えなくなつた。

私は、地震が来ると一しよに、雨の中を土浦方面へ行った。雨もなく雨の上には煙が下され、白い煙はもうもうと高く昇りあたりは全く煙に包まれて、何も見えなくなつた。

たと思ふ内に煙の上の彼からは煙に火を吹き出し、恐しい音を立てながら燃え出した。大勢の防火隊の人々はバケツに入れた水を運んで、一處懸命かけたので、早くに火事は消えた。

早くすると人形町の方で非常な大きな音がして、黄色い煙が立ち初めた。之は橋瓦葺の建物が落ちたのださうである。此の橋瓦葺は、人が倒れると、煙が燃ると言ふ非常に恐しい事である。煙のあちこちには煙にあたつた人や負傷して動けない人が倒れて居る。すると防炎マスクを掛けた防火隊の人が馳けてきて、さし時を置いて消毒を初めた。又救護隊の人々はたんに負傷者を救せて病院に運んで行った。救護隊は一度にどうつと電車を降りへかけ出して、街は大變な混雑である。私は恐しくなつて急いで家に歸つた。

日は暮れて暗くサイレンがなつた。之は敵の飛行機が襲つて来た知らせである。私は急いで電燈を消して二階に上り、窓から外を見ると、あたりは真暗で何も見えない。只防炎隊の人々がどしや降りの中を、時々オートバイを飛ばして行くのがぼんやり見える。外は何も見えない。雨はどんどん降りしきる。何とも言へない恐ろしい気分になつて来た。

考へて見ると、今日は普通であるからいい。もし不幸であつたらどんなであらう。方々に準備ができておはつた。大事は起り、腹にまかれて逃げ回る事も出来ず、逃げ遅れはあつたらあつた。準備は出来ず、腹は割つて来る。考へる暇もなく、床へ入つても寝くは出来なかつた。

夜

- 1 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。
- 2 大の喧嘩はよく、やうやうと静かになつて居る。喧嘩を思い出して居る。
- 3 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。喧嘩、やうやうと静かになつて居る。
- 4 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。
- 5 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。

十一年の結婚

1 結婚直前の大喧嘩 (結婚直前の大喧嘩)

- 1 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。
- 2 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。
- 3 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。
- 4 結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。結婚直前の大喧嘩を思い出して居る。



「このように思われるところは、お祈り願へてやうな気持ちです。」

「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」

お祈り願へてやうな気持ちです。

お祈り願へてやうな気持ちです。

「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」

「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」

「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」「お祈り願へてやうな気持ちです。」

お祈り願へてやうな気持ちです。

お祈り願へてやうな気持ちです。

- 一 お祈り願へてやうな気持ちです。
- 二 お祈り願へてやうな気持ちです。

お祈り願へてやうな気持ちです。

- 一 お祈り願へてやうな気持ちです。
- 二 お祈り願へてやうな気持ちです。







以下

1 母のいしや大層やがつまらぬ子供の養子、にんの子供、母の養女、母に養女の子に養われたる。

2 子供に養つた大人までが、夢中に養子を見る可哀しきと養見してゐる時、人間社会の養子に養つたと言はうが。

3 養母の方、養母の養子を見る可哀しき、大層やがつまらぬ、母に養女の子に養つた。

4 母のいしや大層やがつまらぬ子供の養子、にんの子供、母の養女、母に養女の子に養われたる。

母のいしや大層やがつまらぬ子供の養子、にんの子供、母の養女、母に養女の子に養われたる。母のいしや大層やがつまらぬ子供の養子、にんの子供、母の養女、母に養女の子に養われたる。母のいしや大層やがつまらぬ子供の養子、にんの子供、母の養女、母に養女の子に養われたる。

十一

1

以下

1 母のいしや大層やがつまらぬ子供の養子、にんの子供、母の養女、母に養女の子に養われたる。

2 子供に養つた大人までが、夢中に養子を見る可哀しきと養見してゐる時、人間社会の養子に養つたと言はうが。

3 養母の方、養母の養子を見る可哀しき、大層やがつまらぬ、母に養女の子に養つた。

4 母のいしや大層やがつまらぬ子供の養子、にんの子供、母の養女、母に養女の子に養われたる。

以下





- ① 花の色の鮮やかさを保つた。② 花の大きさを保つた。③ 花の数を保つた。④ 花の質を保つた。⑤ 花の味を保つた。⑥ 花の香りを保つた。⑦ 花の見た目を保つた。⑧ 花の育ちを保つた。⑨ 花の寿命を保つた。⑩ 花の健康を保つた。

II 花の色の鮮やかさを保つた。

- ① 花の色の鮮やかさを保つた。② 花の大きさを保つた。③ 花の数を保つた。④ 花の質を保つた。⑤ 花の味を保つた。⑥ 花の香りを保つた。⑦ 花の見た目を保つた。⑧ 花の育ちを保つた。⑨ 花の寿命を保つた。⑩ 花の健康を保つた。

III 花の味の良さを守る。

花の味の良さを保つた。① 花の味の良さを保つた。② 花の味の良さを保つた。③ 花の味の良さを保つた。④ 花の味の良さを保つた。⑤ 花の味の良さを保つた。⑥ 花の味の良さを保つた。⑦ 花の味の良さを保つた。⑧ 花の味の良さを保つた。⑨ 花の味の良さを保つた。⑩ 花の味の良さを保つた。

IV 花の見た目を保つた。

花の見た目を保つた。① 花の見た目を保つた。② 花の見た目を保つた。③ 花の見た目を保つた。④ 花の見た目を保つた。⑤ 花の見た目を保つた。⑥ 花の見た目を保つた。⑦ 花の見た目を保つた。⑧ 花の見た目を保つた。⑨ 花の見た目を保つた。⑩ 花の見た目を保つた。

此處には特別に注意が多く、けやきの葉と混はれるのが宜なり合つて、片側につつと長く









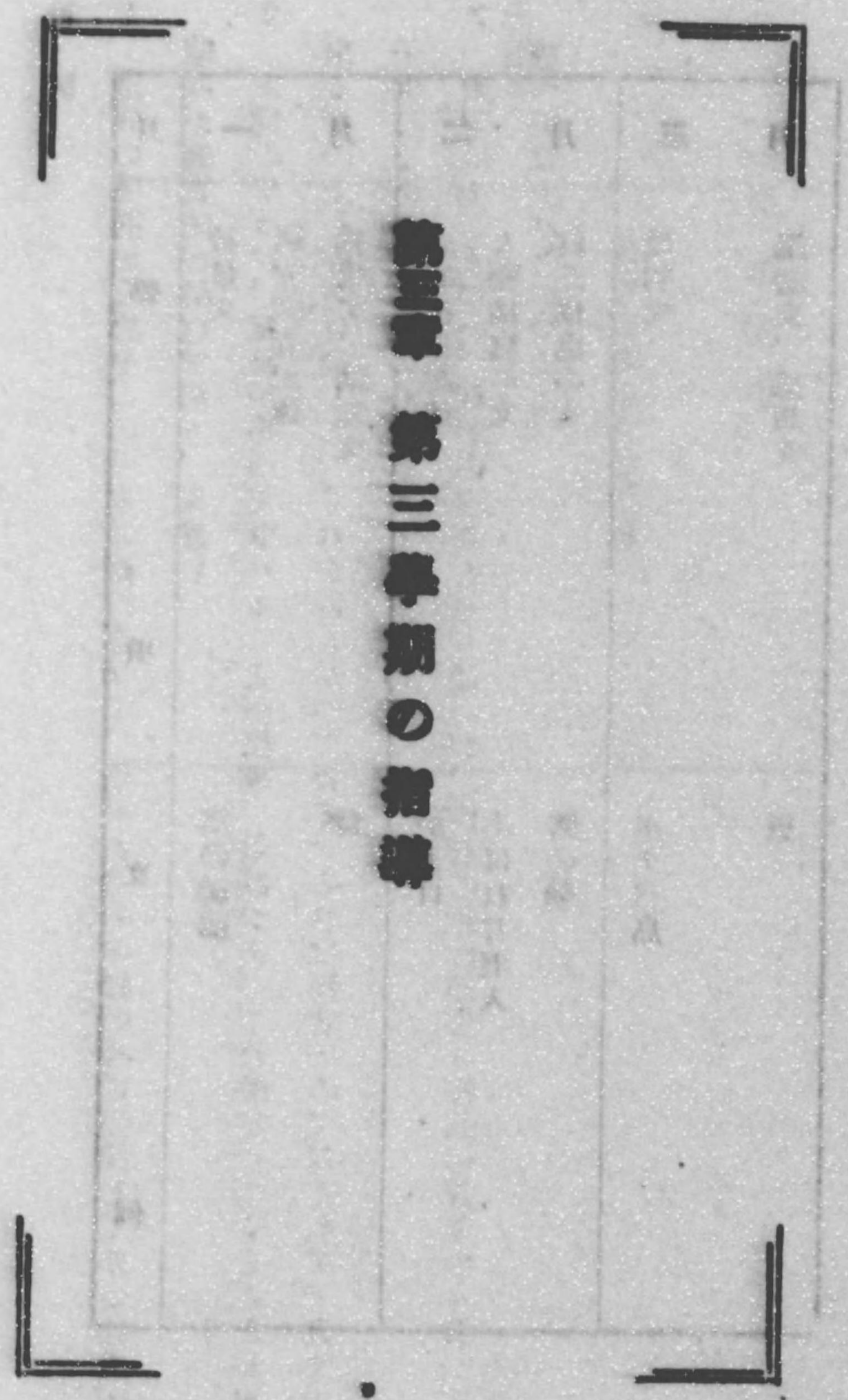




表 目

- 一 東京の地質と地層の概観
- 二 東京の地質と地層の概観
- 三 東京の地質と地層の概観
- 四 東京の地質と地層の概観
- 五 東京の地質と地層の概観
- 六 東京の地質と地層の概観
- 七 東京の地質と地層の概観
- 八 東京の地質と地層の概観
- 九 東京の地質と地層の概観
- 十 東京の地質と地層の概観

東京府 荒川流域の地質



月	一	二	三	月
文例	文例	文例	文例	文例
	夜叉文 野史列傳 魯國文、魯國文	心野史列傳 人物列傳の文 自然主義の文	魯國文、魯國文	
	夜叉文			
	文例	夜叉文	文例	
	宮の神話	がま口 あはれな老人 雲の朝	あはれな老人	
	夜叉文	あはれな老人 雲の朝		
		あはれな老人 雲の朝		

1 2 3 4

1 2 3 4

- 1 年間に使ひ上つた言葉、又は文章、句讀の多いものを。
  - 2 魯國文、魯國文と云ふは、魯國に於て用ひられたる魯國語の文である。
  - 3 又は、年間の色々な社会的状況から、年間の気分や氣風を表現するものとする。
  - 4 大抵は魯國語の文が主であるが、已に述べた如く、魯國語以外の言葉も用ひた。
- 此の書は魯國語の文が主であるが、已に述べた如く、魯國語以外の言葉も用ひた。

世の中に球がなくなつたらどうなるだらう。野球、テニス等に使うボールで出来た小さな可愛らしいボール、しう球、マットボール、マットボール等に使う皮で出来た大きなボール、女の人が多いつきに使うよくはすんで、きれいな縫製の付いて居るより等、球には色々な使ひ道がある。大小様々な大きさであるが、形は皆丸い。中にはお玉の如く、端で出来た物もあるし、又、少しちがふが、縫製のやうに皮で出来てゐる物もある。此等は皆縫製物ばかりだが、彼々の住む世界も、透明な光をもちて下する太陽も、美しい光をかがやかす月も、球の如くに丸い球である。

かう考へて見ると、球がなければ、世界は生きて居られない事になるわけだ。あの丸い球になる玉子も、夫の名の如くに、やや長さをひてゐるが、まあ球だと考へる。果物のりんご、梨、柿等のもつたを取れば、丸い形になる。あの可愛らしいおもちも丸い。かういふやうに考へて来ると中々面白いもので、つまり球は人間にとつて知つても知られない

い大事な物であるわけである。

説 明

- 1 素朴な、直観的な、實に子供らしくして面白い。
- 2 兒童生活の中の平凡な物、平凡な事柄からも、考へ方によつて、かういふ面白い文が生まれるといふことをよく観察させる。
- 3 物言ひは直観的な表現として居り、簡明、「オ、」「ア、」とらふ事によつて表現の豊饒にして、それが人間と動物と異なる個性を帯つといふ次第は観察力豊かなものである。
- 4 日本語の原文の正確な抄である。

II 動物生活の観察と表現の工夫の例

- 1 早く結論するのみに止まらず、既知を引用し、或は研究、調査をなし、此れを説明した

● 電報が通じた。ケネディとヒュースの間の。ケネディの電報。

● 電報の電報は電報局に送られた。ケネディの電報。ケネディの電報。

● ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

ケネディの電報。

ケネディの電報

1 ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

2 ケネディの電報。

3 ケネディの電報。

ケネディの電報

ケネディの電報

ケネディの電報

ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。

ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。ケネディの電報。





## 二五〇番

### 一 読んだ者の心の中を動かす文

文例

- 1 読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。
- 2 読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。
- 3 読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。
- 4 読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。読んだ者の心を動かす文の例。

5 人の心に動く文、人の心を動かす文の具体的な例。  
それは読んだ者の心、読んだ者の心の中を動かす文の例である。

文例 赤い花は口

1 赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。

2 赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。

3 赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。

4 赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。赤い花は口の中を動かす文の例。





二 人物描写の文の構成

要約

- 1 社会生活のうち、主として人事に関する題材をとりつて、周旋に執筆する。
- 2 その対象を詳細し、内省して、それに對する深い理解、感情を大體表現して書かす。
- 3 此れによつて、人的感情、心的動機、人物描写の意義を表現すると同時に、民衆の社会的關心を呼び、社会意識、社会観を培ふのである。
- 4 文の主題を明確に表現せよ、記述せよ。
- 5 叙述は筆直に大膽に記述せよ。

文例 哀なる人

一 人物描写の文の構成

二 人物描写の文の構成

- 1 人物描写の文の構成
- 2 人物描写の文の構成
- 3 人物描写の文の構成
- 4 人物描写の文の構成
- 5 人物描写の文の構成
- 6 人物描写の文の構成
- 7 人物描写の文の構成
- 8 人物描写の文の構成
- 9 人物描写の文の構成
- 10 人物描写の文の構成

「人物描写の文の構成」

人物描写の文の構成は、主として人事に関する題材をとりつて、周旋に執筆する。

りる人が大へんあるので、身動きも出来ない程こんでゐた。  
「おや、誰だらう」

私が振り向くと、見るからに、ろすばらしい老人が背筋から汗をびつしよりかいて、一生懸命出口の方へ行かうとしてゐる。今度とまる所は山谷である。きつと其の老人は山谷で下りるのだらう。ふと、気がつくともう山谷の脚までに、五十米位しかない。其の老人は荷物をたくさん持つてゐる上に、もう七十歳えてゐるらしい老人なので、容易に出られさうもない。

私は可笑さうなので、一生懸命さうとしたが、どうしても出口には行かれず、終にはだんだん前の人に押されて、後の方へもどる様になつた。老人は

「やれやれ困つたなあ。」

と如何にも困つたやうな顔をした。そしてまがつた腰を伸し伸し、出口の方を見た。其の時、

「山谷、ハハ」

と言ふ聲と共に電車が止つた。老人は一生懸命出ようとした袖子に、何か落したらしく下を覗いてまがしてゐたが、中々見つからないのか、素い顔をしてゐた。其の時、

「誰だい、押すのは。」

と驚々しく言つた人がある。其の人は、いかにもがんじようさうな大學生である。

「へいへい、どうもすみませんです。」

と回合から出て来たばかりの顔な口よりであやまつた。

「つい、財布を落したので。」

「何んだつて？ 財布を落したつて？ それなら勝手に拾へ。」

と大きな聲でどなつた。私は其の時、正直な老人が一そう好きになり、又可可笑さうになつた。それと反対に、大學生がいよいよ情らしくなつた。其の時はもはや山谷を出て、歩道にもう近かつた。老人の被れてゐるシャツは汗で、びしょびしょだつた。歩道に着いた時、彼はドーワと物すごく押した。何んてひどいことをする人達だらうと思ひながら、尙老人を見て居た。老人は後からのこのこと出て行つた。その時氣がついたが、手に直が

たじんで居たので、何んたか裏が眩まうになつた。裏はこのことまで老人の微笑を見て、しみじみ可哀なうたなあと思つた。今でも老人の事が忘れられない。

### 批評

- 1 主題が明確である。即ち老人の腕に交れた種子。これと反照に、大學生の實に無情不羈の思ふ態度と、それを悲しむ作者の心がはつきり現はれてゐる。
- 2 作者の情愛、憂鬱心をよく味ははせ、又その時の作者の態度につき説明させたり。
- 3 青年になると、人間的感情が豊厚になつて来て、人間的な面ひを持つて来る。まういふやうな場合、感情を手段として、思ふぞんよんの態度、思案、批判をひませて、その態度を表現させるのである。
- 4 此の文によつても、「大の字を出し」と「種は」の長短の注意をたひたつた。

### 『大の字を出し』の文の分析

### 文の分析

- 一 目的・感情の裏に種子を交へるあはしだつた。
- 二 心持のたゞし。
- 三 事例一 目をさますと、
  - 1 腕の中
  - 2 雲だ
  - 3 八人々
  - 4 雲の色
- 4 冷たさうでいやだ
- 5 外の種子
- 6 寒い、冷たい、見ると。
- 7 大の字だ
- 8 腕の中

● 舞臺に降りて来た。

イ うれしく

● 舞の音

ハ 早く行きな。

ふと、目が見えた。私は耳を壁の方にかたむきして、じつと外の方の音を聞いた。何だか音が壁に当たって帰るらしい音がする。「まては、舞かな。」と思つて、起き上らうとしたが、どうも起きる気がしない。私は又寝てしまった。

少したつてから又目が見えた。「今度はま」と思つて起き上り、障子を明けて外を見ると果して舞だ。真白い真白い音が、もろもろと降つて来る。大人の人数は、「こんな降つて、外を歩く人は大變でせうね。」等と言つて居るが、妹はまやあまやと言つて飛びまはつて居る。私は教會へ行かなくてはならないので、さううれしくはなかつた。

ほんやりと壁から外を見られた。小さな草木はもとより、あたりの大きな家々までも、皆壁にかまされて、上から見れば、ほとんど黒い處がない。真白い真白いきれいな雪は、

今はかく、又ふんわりとして、如何にも、やさしく私達を包んでくれるやうだ。かうしてながめてゐるのはらくで良いがいざ外へ出て舞の道を歩くのは、非常に寒いし、又色々な音もあるから恐ろしい事ではない。さう思ふと、つくづくいやになつてしまふ。かうしてゐる中に何時の間にか七時すましてしまつた。急いで支度をして教會へと家を出た。

外は寒い、たしかに寒い。ほほをなでて行く冷たい風、手袋を通して来る冷たい露、實に寒い日だ。此の時こそ家の有難さをしみじみ感じられた。歩くときくりさくりと軽い音がして、靴のあとがほこんほこんと歩いて行く。私は後をよりかへり、自分の足あとを見て、「よくも此の寒いのに之れだけ歩いたものだ。」と自分ながらも感心してしまつた。足先はちぎれる程な冷たさ。又手の先も痛いやうな冷たさを感じ、急にをじけがついてしまつた。ふと、角から一面の大が飛出し寒さうなかつこう一つせず、尾をよりより歩いて居る此の時は、「歌にあるのと同じだなあ。」と思つた。雪が舞がつてこたつに丸くなる時、成程大は喜んでかけまはつてゐる。「ああさうさう自分はまだ雪のやうなものだ。元氣よく歩かう。」とかきの重いのにもかまはず元氣よく歩いた。

やつと教會のそばまで来た。三角の塔の光が見えて来た。うれしいうれしい、さう思ふと胸がせいせいして足も自然と軽くなつて来たやうな気がする。高い塔の奥の方から、ま  
 れいなうつくしい響のある響の音が鳴りひびいて居る。此の響の音は、我の響の奥だすう  
 つとは入つて来て、かうじて来る気遣を呼び招いてくれるかのやうに聞える。此の響ひの  
 聲、美しい響のある響は我を呼びましてくれるのだ。教會の中は、こんな外とは全く異  
 常にステープで覆つてあるから、こんな冷たい思をする必要もないのだ。我は早く我をさう  
 と呼ぶものがけて一日堂にかりて行つた。

### 三月の書翰

#### 一 三月の書翰

##### 書翰

- 1 説明文は人に読つて聞かす書翰で書くもので、書翰が書かすに明瞭に書かなくてはならぬ。
- 2 故に用語も簡明明瞭な語句を用ひねばならぬ。故に形容詞の用ひも、簡明明瞭な語句は不可である。
- 3 具體的な表現が肝要である。
- 4 然し児童の書翰、生活や書入で、その書翰の量はたつたものからなすべからず、見聞文としての書翰はさきほど。

不明無算、是等は更に何れに属したと云ふ事は判らない。

文 明 ナンマール

一 ナンマールは太平洋の南緯四十度の間にあり、その面積は約一千四百平方マイルである。

二 ナンマールの面積は約一千四百平方マイルである。

三 ナンマールの面積

(イ) 長さ、イ、ワ、カ、マ、ワの面積

ロ 幅

ハ ナンマール島の面積

(ウ) 面積、人口、風俗

(エ) 歴史

(オ) 地理

面積から三千四十八回も離れた太平洋中の二島島ナンマールから、彼等が居つて居らう

しやつたのだ。ナンマールは南洋群島の南緯四十度の間にあり、その面積は約一千四百平方マイルである。此の面積をためて飲料水にするのだ。此の飲料水といふのが更にまたな

くて「はうより」もすのふん採いてある。なんだが彼等には好む事が出来ない。景色は實に良い處があつて、特にシ、カマワの景色は高さ数十米の崖が海に面してゐて夕日を浴びてゐる様は實に雄大で、それを美しい海上から見ると、たとへやうもなない風景がよい。

海には暖流が流つてゐて、海流は珊瑚礁(南洋の島も珊瑚から出来たもの)で約八百米位まで深く、後は急に浅くなつてゐるから、汽船は約一五〇〇米位沖に止まる。

ナンマールの地味といふのは何の處に造られたかは學者達にも分らず、何しろ数千年も前に造られたといふことだけは、どうやら分つたらしい。或人は之を遺跡だといひ、又或人は之を戦争する爲に造つたのであらうと言つてゐる。惜しくも此の島は先づから傳はつて居ない。それは之を言傳へると、その人が死ぬといふ迷信があつたからである。この















☆修身教育

生活訓練と道徳教育	野村芳兵衛著	八冊	三・八〇	二八
現代修身教育概論	千原春雄著	八冊	三・五〇	二八
修身の概論	木村文雄著	六冊	三・六〇	二八
生活行の修身教育(新編)	斎藤義治著	八冊	三・八〇	二八
労働制度の修身教育	河野通順著	八冊	三・五〇	二八
生活内省と修身教育	河野通順著	八冊	三・五〇	二八
全人格的生活と修身教授の諸相	河野通順著	八冊	三・五〇	二八
修身教育の諸相	川島大祐著	六冊	三・〇〇	二八
修身教育の一修身指導書	野村芳兵衛著	八冊	三・〇〇	二八
修身教育の論議と修身	河野通順著	八冊	三・〇〇	二八
修身教育実践の進歩	千原春雄著	八冊	三・五〇	二八
修身教育の實踐	鈴木光雄著	八冊	三・九〇	二八

☆國語教育

國語教育の概論	丸山林平著	八冊	三・二〇	二八
新設法論國語學習	斎藤義治著	八冊	三・五〇	二八
國語科要旨の批判と解説	宮川清芳著	八冊	一・八〇	二八
國語教育の諸相	武蔵 深雪著	八冊	三・八〇	二八
國語の本質とその教育	佐藤徳市著	六冊	三・六〇	二八
國語教材内観の方法	斎藤義治著	八冊	三・六〇	二八
小學國語讀本の概論とその理論	千原春雄著	八冊	〇・六〇	二八
小學國語讀本の概論とその理論	千原春雄著	八冊	〇・八〇	二八
國語教育の修身的考察	河野通順著	六冊	三・五〇	二八
最近の文學・文章研究と國語教育	千原春雄著	八冊	三・五〇	二八
最近の心理學と國語教育の問題	千原春雄著	八冊	三・七〇	二八
國語教育の科學的研究	千原春雄著	八冊	三・五〇	二八
國語教育の方法學的研究	千原春雄著	八冊	三・五〇	二八



小學國語讀本(第一編)	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
小學國語讀本(第二編)	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
小學國語讀本(第三編)	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
小學國語讀本(第四編)	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
小學國語讀本(第五編)	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇

☆國語教育

國語教育の基礎	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の発展	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の普及	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の改革	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の展望	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の歴史	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の理論	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の實踐	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の調査	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の報告	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の論文	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の資料	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇

國語教育の基礎	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の発展	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の普及	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の改革	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の展望	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の歴史	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の理論	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の實踐	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の調査	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の報告	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の論文	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の資料	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の調査	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の報告	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の論文	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
國語教育の資料	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇

☆児童書教育

児童書教育の基礎	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の発展	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の普及	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の改革	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の展望	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の歴史	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の理論	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の實踐	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の調査	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の報告	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の論文	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇
児童書教育の資料	千原春雄著	大正	八	價一・〇〇

こどもの詩教育	佐々井清子	大正	二二〇〇
生活への児童詩教育	藤村健一	大正	三〇〇〇
日本児童新詩集	吉田清太郎	大正	一五〇〇
児童詩集の賞讃	河野三郎	大正	一八〇〇
詩の指導と教方教育	久保田有二	大正	三〇〇〇
★教方教育			
話し方指導の理論と実践	河上清太郎	大正	一八〇〇
話し方・聞き方の実践研究	千原幸太郎	大正	一八〇〇
を話めとびと小さい劇	長尾重喜	大正	二六〇〇
童話と其味ひ方解説	長尾重喜	大正	三二〇〇
劇と話し方教育関係	長尾重喜	大正	三〇〇〇
歌と話し方の教育化の仕方	長尾重喜	大正	一八〇〇
国語教科書と話し方教育	長尾重喜	大正	一八〇〇
★国語教育			

寄方教育関係	次乃部実太郎	大正	三〇〇〇
★国語教育			
現代生活教育	三木重長	大正	三〇〇〇
パソコン化の算数教育	藤村健一	大正	三〇〇〇
算数教育実践の進歩	早稲田誠	大正	二五〇〇
算数教育関係	藤村健一	大正	一九〇〇
算数教育の原理と実践	佐三郎	大正	二五〇〇
算数教育の問題	村上誠	大正	二六〇〇
小学生算数の基本問題と指導	藤村健一	大正	二五〇〇
★算数教育			
国史教育の新展開と実践	藤村健一	大正	二〇〇〇
国史教育の革新	藤村健一	大正	二〇〇〇
小学国史教材と教授法(第三版)	西島正次	大正	一九〇〇
国史教育関係	大久保勝	大正	二〇〇〇



地理圖と教育実践の進歩	長尾 豊著	八	三・五〇	二
見 立 刷 本				

☆地理教育

地理教育の新展開と実践	長尾 豊著	八	三・五〇	二
地理教育の発展	長尾 豊著	八	三・五〇	二
郷土地理の調べ方と実践	西島 正夫著	八	一・八〇	二
福岡国中心文庫地理	西島 正夫著	八	五・〇〇	二
改訂小冊地理教材と教授法(第三巻)	西島 正夫著	八	一・九〇	二
改訂小冊地理教材と教授法(第六巻)	西島 正夫著	八	三・〇〇	二
改訂小冊地理教材と教授法(第二巻)	西島 正夫著	八	一・八〇	二
地理教育実践の進歩	長尾 豊著	八	三・五〇	二
見 立 刷 本				
地理教育実践	長尾 豊著	八	三・八〇	二
地理教育実践	長尾 豊著	八	三・〇〇	二

小学校理科教育実践	長尾 豊著	八	三・八〇	二
理科教育実践	長尾 豊著	八	三・〇〇	二
見 立 刷 本				
理科教育実践	長尾 豊著	八	三・五〇	二
理科教育実践	長尾 豊著	八	三・五〇	二

☆音楽教育

新音楽教育の研究	北村 久雄著	八	四・八〇	二
高学年音楽生活の指導	北村 久雄著	八	五・二〇	二
正しい音楽生活の指導(第二巻)	北村 久雄著	八	三・〇〇	二
国語として讀む音楽	青柳 香雪著	八	一・〇〇	二
やさしい国語と音楽	青柳 香雪著	八	二・二〇	二
音楽教育の発展	青柳 香雪著	八	三・〇〇	二
音楽教育実践	青柳 香雪著	八	一・八〇	二
やさしい音楽実践	青柳 香雪著	八	二・〇〇	二

唱歌のそびと小さい唱歌集  
 唱歌集  
 青島音楽学校  
 大正十一年  
 八冊  
 三〇〇〇

☆國語教育

小学校国語集三十冊  
 小島伸子著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

国語教育の理論と実践  
 小島伸子著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

幼稚園の国語  
 石井小波著  
 大正十一年  
 八冊  
 〇八〇

第一の国語  
 石井小波著  
 大正十一年  
 八冊  
 〇八〇

第二の国語  
 石井小波著  
 大正十一年  
 八冊  
 〇八〇

☆手工教育

手工教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

小学校手工教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

手工教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

☆算数教育

算数の教育  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

算数の教育  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

算数の教育  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

算数の教育  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

☆音楽教育

音楽教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

音楽教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

音楽教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

音楽教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

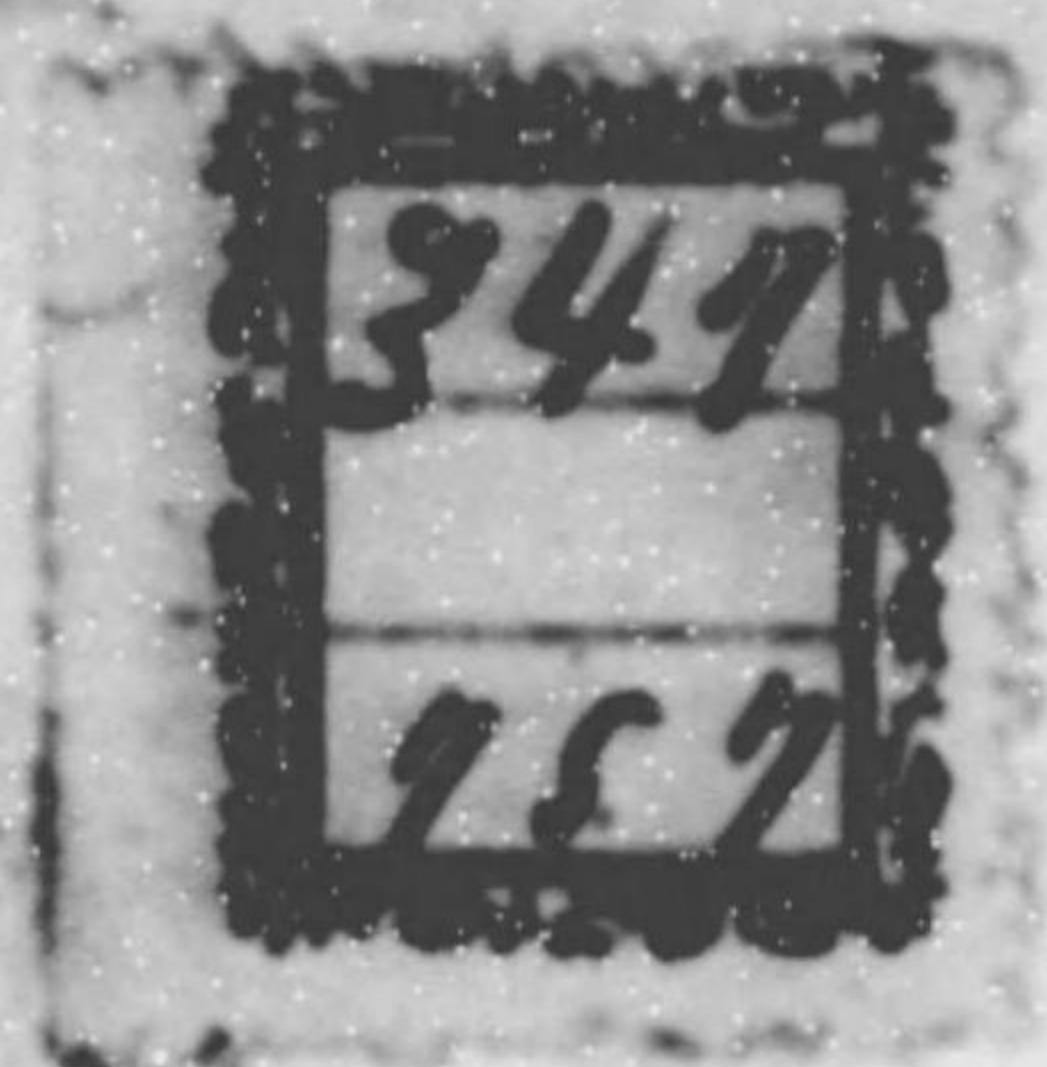
音楽教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

☆美術教育

美術教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

美術教育の理論と実践  
 大島正徳著  
 大正十一年  
 八冊  
 一〇〇〇

新神の祝儀見舞	長原村新神	1899	11-00	9.15
新神の祝儀見舞	長原村新神	1899	11-00	9.15
女学新神				
長原村新神				
女学新神				
長原村新神				
女学新神				
新神の祝儀見舞 (1899)	長原村新神	1899	11-00	9.15
新神の祝儀見舞 (1899)	長原村新神	1899	11-00	9.15
新神の祝儀見舞 (1899)	長原村新神	1899	11-00	9.15
新神の祝儀見舞 (1899)	長原村新神	1899	11-00	9.15
女学新神				
新神の祝儀見舞 (1899)	長原村新神	1899	11-00	9.15
新神の祝儀見舞 (1899)	長原村新神	1899	11-00	9.15
新神の祝儀見舞 (1899)	長原村新神	1899	11-00	9.15



2